

Title	動詞呼応の種類(その4)
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 54 p.1-p.20
Issue Date	1981-10-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80855
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

動詞呼応の類型（その４）

出口 厚 実

On the Typology of Nominal-Verb Agreement (4)

Atsumi DEGUCHI

In the preceding sections we are concerned with the topic of Forced Agreement in cases involving various kinds of demoted subjects.

§ 2.6.4. examines the type of Forced Agreement triggered by reflexive passive or impersonal structures.

2.6.4.1. Data from Spanish

2.6.4.2. Italian

2.6.4.3. Polish, Czech, Serbo-Croat, Classical Aztec

2.6.4.4. German, French

2.6.4.5. Russian

2.6.4.6. Reflexive impersonals with a possible non-human PRO as the initial Subject.

2.6.4.7. In this section we intend to interpret and explain the often noted parallelism between auto-reflexive clauses and reflexive (impersonal) passive structures found across languages.

The common denominator of the various uses of the reflexive marker is viewed as a decrease by one in the number of distinct arguments associated with the predicate in question.

§ 2.6.5. is a brief discussion of the possibility of Forced Agreement by direct objects. Examples from Hungarian and Nahuatl.

§ 2.6.6. points out the intermediate position of the 3rd person plural marker between the personal and impersonal agreements. Data from Modern Hebrew, Russian, Persian, Spanish.

§ 2.6.7. A general characterization is given of the extent to which a clause can be considered having a Forced Agreement.

§ 2.6.8. The term ‘Anti-agreement’ is introduced in order to isolate a specific situation in which a motivated lack of agreement-trigger is not marked on the verb at all, unlike in the case of Forced Agreement, but corresponds to a complete loss of the local agreement phenomenon. Data from Ulcha, Nanai, Kapampangan.

2.6.4. 再帰非人称文

一般にImpersonal（無人称・非人称）と分類される構文の中に、再帰辞が非人称性をマークするタイプがある。いくつかの統語的理由から生じる‘主語不全’の状態に3人称の無標呼応が強制されるのを前稿 § 2.6.1 ～ § 2.6.3. で例示したが、再帰非人称文においても動詞は、通常その言語に見られる他の無主語構造と同じ呼応形態素を持つ。

2.6.4.1.

スペイン語は再帰形式を疑似再帰的に、あるいは非再帰的に多方面に拡大使用する傾向の著しい言語の一つである。再帰代名詞3人称付接形（Clitic form）*se* は(1)のような文で Passive Morphology の一部と見なされることがある。

(1)	Se	vende	el	libro.
	Refl	sell	the	book
		3 sg	sg	sg

‘One sells the book; The book is sold.’

上例だけを見ると、動詞 *vende* は意味上の Patient である *el libro* と正常な呼応が成立して 3 sg に実現されているのか、非呼応の 3 sg なのかは判断し難い。しかし、名詞句 *el libro* ‘the book’ が複数化すれば、標準的なスペイン語で動詞は 3 pl の呼応マーカーをとる [cf. (2a)].

(2)	a.	Se	venden	los	libros.
		Refl	sell	the	books
			3 pl	pl	pl

	b.	Se	vende	los	libros.
		Refl	sell	the	books
			3 sg	pl	pl

(3)	a.	Se	venden	libros
		Refl	sell	books
			3 pl	pl

	b.	Se	vende	libros
		Refl	sell	books
			3 sg	pl

そこで、(2a) も(1)も受動文で動詞はその派生主語と一致していると認めることができよう。ところが、規範文法家がしばしば誤用として狙上へのぼせて来た (2b) (3b) に類する構文を常用する話し手もある。そこに含まれる唯一の名詞句（*los*）*libros*〔複数〕がこれらの文で呼詞でないのは明らかであるから、動詞は強制呼応によって 3 sg 形 suffix をとると考えても何ら不都合はない。上掲(2) (3)の文タイプにおける呼応の取扱いは、言語使用面の可変数に属する単なる一致の揺

れとして片付けてしまうことができない重要な問題を含んでいると思われる。

(1) (2a) (3a) のみを容認する話者の場合に限っても、動詞と主語 NP との間に呼応が行なわれているという見方の他に、むしろこれらの NP は直接目的語でありながら、呼詞として働くとする分析もある。特に非人称文 e.g. (2b) (3b) の存在が偶然の一過性逸脱によるのではなく、構造上の再分析に基く深い動機をもつものであることは、次のような、更に純粋なタイプの非人称文と照し合せれば首肯できるであろう。

- (4) Se respeta a los valientes.
 Refl respect OM the brave men
 3 sg pl pl

‘People respect the brave men’

- (5) Se vive bien aquí.
 Refl live well here
 3 sg

‘One lives well here’

文(4)の NP は定人間の対格・与格に特有な格表示 ‘a’ を持っていて、疑いなく非主語であり、自動詞 vivir ‘to live’ を含む(5)には名詞辞項が存在しない。従って両文とも無呼詞の状態で無標の 3 sg 呼応形態素が与えられたと見るのが妥当であろう。前掲のスペイン語再帰文で再帰 marker は一貫して動詞前位 (i. e. 無標語順では語頭) を占めているのがわかる。また同上文の意味解釈には不定の人間動作主・経験者が常に言及されることから、一般に語頭位に来る se に統語的主語の資格を認めようとする直観やその種の心理的再分析を強調する分析が見られるのは事実である。se を含む文において、主語があるのか無いのか、何が主語であるのかの論議に Agreement が重要な役割を演じるけれども、その他の多くの統語的事実や意味的基準も考慮に入れなければならず、ここでは、強制呼応現象 (の一種) がスペイン語再帰非人称構文に付随することを指適するに止める。¹⁾

2.6.4.2.

再帰 clitic を受動・非人称表現に利用する例は前項スペイン語データにほぼ完全に平行する形でイタリア語にも認められる。²⁾

- (6) a. Si guardano le donne.
 Refl look-at the women
 3 pl pl pl

‘One looks at the women’

- b. Si guarda le donne.
 Refl look-at the women
 3 sg pl pl

- (7) Quando si è triste, si beve.
 When Refl is sad Refl drink
 3 sg 3 sg

‘ When one is sad, one drinks ’

上文 (6b) (7) はそれぞれスペイン語文 (2b) (5) に対応する構文で、動詞 *guarda, è, beve* は主語不在に起因する強制された呼応形で 3 sg 形態素（音形上は ϕ form）を含むと分析されるであろう。

2.6.4.3.

スラヴ語もまた同類の再帰非人称構造を持つ。ポーランド語³⁾ (8) (9) ロシア語⁴⁾ (10) 各文で動詞は 3 sg 能動形をとり、文中に NP がある場合でもそれとの一致は見られない。

- (8) Dokonuje się prace.
 complete Refl works
 3 sg pl

‘ The works are being completed ’

- (9) Idzie się szybko.
 walk Refl quickly
 3 sg

‘ One walks quickly ’

- (10) Tam xopošo rabotaetsja.
 there well work-Refl
 3 sg

‘ One can work well there / One feels like working there ’

チェコ語・セルボ・クロアチア語にも、統語的主語を欠く動詞が再帰代名詞 *se* を伴い 3 sg 形に屈折する文 (11)⁵⁾ (12)⁶⁾ が発見される。

- (11) Tady se dobře jí a pije.
 here Refl well eat and drink
 3 sg 3 sg

‘ Here one eats and drinks well ’

- (12) Ide se u pet sati.
go Refl at five o'clock
3 sg

‘ One goes at five o'clock ’

主語、目的語の2項呼応を示すClassical Aztec (Náhuatl⁷⁾)の動詞は、再帰辞を前接された語幹が非人称的に利用され、3 sgの主語一致形をとる。

- (13) Mochihua in tlaxcalli.
Refl-make det tortilla(s)
3 sg

‘ One makes tortillas ’

- (14) Mitoa in tlatolli.
Refl-tell det words
3 sg

‘ One tells the words ’

2.6.4.4.

表層形式のみを分類基準として採るならば、例文(15)⁸⁾に代表されるドイツ語再帰構文は強制呼応と無縁で、主語esを持つ有主語再帰文とみなされるかも知れない。

- (15) In diesem Raum arbeitet es sich gut.
this room work it Refl good
3 sg

‘ People work well in this room ’

しかし、(16)⁸⁾との同義性を基盤として直示的な指示能力がesにあるか否かの議論はさて置いて“Platzhalter”のesは、(17)(18)⁹⁾に例示されるように、呼応をtriggerする能力を欠くのが実態であろう。

- (16) Man arbeitet in diesem Raum gut.
(17) Es waren die Kinder, die ihm das sagten.
it were the children who him that told
3 pl pl pl 3 pl

‘ It was the children who told him that ’

- (18) Es kamen auch schon damals
it happened too already then
3 pl

dolle Geschichten vor.
crazy stories
pl

‘Already then crazy stories happened to’

従って (15) はロマンス語・スラヴ語等に観察される上述の無主語再帰文と大差ないことになる。ドイツ語で *es* が現われるのは、構造上の空隙充填を厳しく要求し、“動詞次位の原則” に固執する個別言語に特有な浅層の統語現象と見るならば、この文を強制呼応の事例に数えることは強ち的外れではない [cf. 前稿（その3）, §2.6.3.3.]。

フランス語に存在する次の対文¹⁰⁾は論理的意味で等価であるが、主語が後置されれば（見方を変えれば、主題化を受けて前置されることがなければ）、(19b) のように再帰辞付き動詞 *vend* は主語不全となり *expletive* の *il* を挿入される。

- (19) a. Beaucoup d'article anglais se vendent à Paris.
many articles English Refl. sell in
3 pl
- b. Il se vend beaucoup d'article anglais à Paris.
it Refl. sell many articles English in
3 sg

‘Many English goods are sold in Paris’

この場合もやはり *il* が一致を誘発したのではなく、*il* の生起と独立した無標 *agreement* と考えられる。

2.6.4.5.

再帰非人称の意味構造は談話脈絡の中で推定・復元される匿名化された人格、あるいは数・人称の区分を超越した総称的不定人間で特徴づけられ、統語的には‘確かな、信頼すべき’主語が欠落する。この点で、意味的な Agent 不全または“agentless”と統語上の主語不全 or ‘subjectless’がある種の相関を示している。再帰構文にはこの他、定人間の *argument* と明示的に共起しながら、無主格文であるために動詞は無標呼応形態素をとるタイプがある。ロシア語文¹¹⁾ (20a) (21a) は共に行為者を主語として選択し得る動詞 *rabotat* ‘to work’, *spat* ‘to sleep’ を含むが、この

NP を間接目的語に指定する両構文では動詞は再帰辞 *-sja* と組み、無標形の 3 sg 又は *n, sg* 形に実現されている。¹²⁾

- (20a) *Segodnja mne ne rabotaetsja.*
 today to me not work-Refl
 3 sg

‘Today I don’t feel like working’

- (21a) *Segodnja mne ne spalos’*
 today to me not slept-Refl
 3 sg

‘I did not feel like sleeping today’

これらの文は、類義文 (20b) (21b) で主語に立つ *ja* ‘1 sg’ が意味的な背景で間接目的語へ降格し再帰化プロセスを惹起するが、結果として生じた主語空位が *rabotaet, spalo* の強制呼応形を導くと考えられる。

- (20b) *Segodnja ja ne rabotaju.*
 today I not work
 1 sg

‘Today I am not working’

- (21b) *Segodnja ja ne spal.*
 today I not slept

‘I did not sleep today’

2.6.4.6.

再帰強制呼応文の中で人間主語を想定しないケースはごく稀である。スペイン語の例¹³⁾ (22) (23) では動詞 *tratar* の主語を不定の [+ Human] 要素と限定できない。¹⁴⁾

- (22) *¿ De qué se trata aquí ?*
 of what Refl treat here
 3 sg

‘What is going on here?’

- (23) *No se trata de reir ahora.*
 not Refl treat of laughing now
 3 sg

‘It is not a laughing matter’

2.6.4.7.

様々な言語で再帰辞が不定主語や無主語構造の標識を務めるのは単なる暗合又は借用とは思われない。無呼詞と再帰構文の関係はシンタクシスの通時的側面からも興味深い課題となっているが、ここで若干のスペースを割いて、再帰、再帰受動、再帰非人称を繋ぐ共通の糸は一体何なのかと探っておきたい。典型的な再帰文、v.g. スペイン語の (24) は、単に表面上だけ「再帰」である他の諸々のタイプと区別するため『自己再帰文』と呼ぶことにする。

(24) Juan se mira. 'John looks himself'
 John Refl look
 3 sg

自己再帰文(24)と再帰受動(非人称)文(25)の間には、しばしば見落され勝ちな重要な連関が隠されている。

(25)	Se	vende(n)	libros.
[= (3)]	Refl	sell	books
		3 sg (pl)	pl

その一つは動詞の意味に共演する辞項成分が共に実質的に一である事実である。(24)でJuanが動作主と被動者を兼務している故に、2種の意味役割と統語格が動詞に結合しているにもかかわらず、参与者はJuanただ一人である。また文(25)のvender‘売る’は元来、動作主NPが不可欠な動詞であるが、売り手が誰なのかを特定する必要がない場合にのみ、この種の表現が用いられるのであるから、動作主が意味世界の共演者として最小化され近似的 ϕ とみなされると、この文はlibrosを唯一辞項として持つ文となろう。即ち、両文に共通するのは2種の統語項と結合する動詞が“実質的に”一体の意味成分しか持たないという点である。3項支配及び1項支配動詞にもこの分析は当てはまるので、一般化して(26)をスペイン文法の規則性の一つとして捉えることができよう。

(26) n 項の辞項を統語的に支配する動詞が $(n-1)$ 体の意味成分と共起する時に再帰辞が出現する。

(26) にはさらに幾つかの統語上の制約が課せられなければならないが、 ϕ 項支配の動詞、e.g. 気象表現に係わる *llover* ‘to rain’, *nevar* ‘to snow’ 等が原義のまま *se* でもって非人称化されない事実を予測する。

(27) a. * Se llueve
Refl rain 'It rains',
3 sg

b. * Se nieva
 Refl snow ‘ It snow ’
 3 sg

単人称動詞とseの背反は素性 [Human] を介して選択制限として処理されるのが通例だが、抽象的な非人間又は [Human] に関して中立な不定 Agent を内包する文にもseが出現し得るので、万全の説とは言えない。いわゆる「自発」の解釈を許す (28) は人間の直接関与しない熱や冷却に起因する破壊に言及してもおかしくない。

(28) Se rompió el vaso.
 Refl broke the glass
 3 sg

‘ The glass broke ’

ただ破壊の原因である主語が不明かまたは背景に押しやられたために、2項動詞 romper ‘壊す’ が (26) の原則に則り再帰形式を得たと分析できるであろう。

再帰とは、その統語機能に絞って考えれば、同一要素の二重言及を避け、構造を簡便化する手段であるが、この面についても自己再帰文と再帰受動文は相通じている。自己再帰文で文中の唯一辞項が主語であり同時に直接目的語の関係をもつのは自明である。(25) のような疑似再帰文では、無主語で直接目的語のみで構成される文を忌避する普遍的な傾向から、その NP が主語扱いを受けようとする素地が存在するが、完全に主語化されて対格性を失うと libros の意味役割を回復するのが困難になってしまう。そこで受格の主語への中途半端な昇進が起こり、主語でもあり、目的語でもあるという2重統語関係が生まれる。即ち、表面的に自己再帰文と同等になり、再帰形式が導入されるのは不思議ではない。

さて §2.6.4.1. で見た (4) (5) のタイプの非人称文での再帰辞の出現は(26)の予測に合致するが、このseは一体どの要素の分身あるいはコピーなのか、問題は必ずしも透明でない。

(4) Se respeta a los valientes

(5) Se vive bien aquí.

拙稿 (1978)¹⁵⁾ では主語の半降格〔(4)では間接目的語へ、(5)では直接目的語へ〕の結果生まれる coreferent 構造に再帰化の素因を求めた。この分析に従えば、(26) にもかわらず再帰辞の具体的導出は(25)の受動構文と(4)に類する非人称文とで異なるのを容認するように見える。再帰受動文と再帰非人称文の実際の違いは基底直接目的語の有無によって、主語降格の性質が左右されるため、(n-1) の具現が半昇進又は半降格のいずれかに結びつく。この点を今少し詳しく見てみよう。基底主語に PRO を含む構文で PRO は自動的に降格を義務づけられている。降格先の文法関係は関係 Hierarchy の順で下降するが、直接目的語が既に占められている(25)の場合、次の間接目的語となる。もし主語の座に残る original の PRO が、主語へ半昇進して来る直接目的

語の **libros** によって消去されれば、**PRO** の正副の間で再帰化が適用されることはなく、また間接目的語に残存する半身は音形的実現を持たず、**se** の直接原因は基底受格の2重生起であると解釈される。名詞句の関係変換にのみ注目してこの文構造を図式化したのが(29)である。

(29)	vender	PRO	libros
i)		1	2
ii)		$\left\{ \begin{array}{c} 1 \\ 3 \end{array} \right\}$	2
iii)		3	$\left\{ \begin{array}{c} 2 \\ 1 \end{array} \right\}$

Se venden libros

ここでi, ii, iii は層(stratum, coordinate)を示し、1, 2, 3は主語、直接目的語、間接目的語の略号として用いられている。もし **libros** の主語への昇進がなければ、主語**PRO** は生き残り間接目的語と同一指示となって Reflexivization が作動する。

(30)	vender	PRO	libros
i)		1	2
ii)		$\left\{ \begin{array}{c} 1 \\ 3 \end{array} \right\}$	2

Se vende libros

この文は(4)(5)と同様な非人称**se**を含むことになる。(29)では基底直接目的語（＝最終主語）が agreement trigger であるのに対し、(30)の構造で**PRO**は主語ながら呼応資格はなく動詞は強制呼応で3 sgを与えられると考える[cf. 後述 §2.6.7.]。

Johnson & Postal の弧対文法 (Arc Pair Grammar) は (4) と同型式のスペイン語非人称文に概略次のような分析を与えている。比較を容易にするため網型表記を派生理論風に焼き直し、詳細を省けば、文 (4) は(31)として捉えられている。¹⁶⁾

(31)	respetar	PRO ¹⁷⁾	los valientes	dummy
i)		1	2	
ii)		1	cho	2
iii)		φ	cho	$\left\{ \begin{array}{c} 2 \\ 1 \end{array} \right\}$

Se respeta a los valientes.

彼らのアプローチには少なくとも2つの疑点が残されている。まずdummyの直接目的語を導入してこれが基底受格たる **los valientes** を失業させ、さらに主語へ昇進して**PRO**をも削除させる働きを負わせる。しかし、**PRO**のように代“役”でなく、意味構造に全く対応物を持たない無音形要素が、音形実現をもつ定意味名詞句を蹴落す理由があるのだろうか。また実体を欠く dummy が最

高ランクの主語の座をたとえ半分にせよ奪取する根拠を示すことが可能なのだろうか。(31)のもう一つの難点は *los valientes* が *Chômeur* へ転落するという見方で、この種の NP が直接目的語（又は間接目的語）として振舞う事実と矛盾する。即ち、文 (4) の *los valientes* が代名詞化されると(32)のように付接代名詞形になることの説明がつかない。

- (32) Se los respeta.
Refl them respect. 3 sg

前記のような分析を強いられるのは、彼らが ¹⁸⁾Motivated Chômage Law に固執し、(30) に内在する自発降格 Spontaneous Demotion を否認する立場をとるためである。

従来の枠組みでは関連づけられることのなかった「自発」意味に解釈される (28) のタイプと (33) 文は二つの特徴を共有しているように思われる。

- (33) Se está bien aquí.
 Refl is well here
 3 sg

‘ One feels good here ’

両文は Perlmutter (1978)¹⁹⁾ や Johnson & Postal (1980)²⁰⁾ の主張する、いわゆる非対格 (Unaccusative) 節をその基底にもつとみなせるだろう。所格、副詞句などを省略して (28) は (34a) に、(33) は (34b) に模式化される。

- (34) a. romper el vaso b. estar PRO
- i) 2 2
- ii) $\left\{ \begin{array}{c} 1 \\ 2 \end{array} \right\}$ $\left\{ \begin{array}{c} 1 \\ 2 \end{array} \right\}$

これらの動詞は初層で主語を欠き、 *unaccusative* 直接目的語を持つが、それが半昇進して再帰化を誘発する点も類似する。違いは主語に転進した要素が呼詞になるか [(34a)], そうはならず動詞が 3 *sg* の無標形を得るか [(34b)] にある。スペイン語の非対格文は (34) と同種の再帰文として現われる場合の他、自動詞文(35)無人称文(36)の3様の表層実現をもつ。

- (35) Dios existe. ‘ God exists ’
 God exist
 3 sg

- (36) Había muchos libros.
had many books 'There were many books'
3 sg pl pl

特に **haber** を動詞として含む文 v.g (36) の NP が直接目的語を指定されるのはこの動詞の原義から見て当然の **subcategorization** であるし、この種の存在動詞の核となる NP は主題性が低く、主語化を嫌って対格に止まる現象は、この仮説に適合する。他方、(35) では **unaccusative** 直接目的語が完全主語化されているように見えるが、厳密に言えば「主語性」には様々な度合があって、主語の **coding** を示す最強の特性である **agreement** 以外の点では、その程度は述語の種類によって異なる。又、文 (36) は呼応に関して興味あるデータを提供する。前出の Perlmutter や Johnson & Postal の枠組みに従えば、最終層は必ず主語を含まねばならない (**Final 1 Arc Law**) と規定されるので、表層の無主格は「見せかけ」で同文には何らかの擬制主語をしつらえて置く必要がある。この通則が妥当かどうか、例外承認の適否をさておき、非対格構造を阻止しようとする傾向は一部のスタイルにしばしば見出される (37) に類する例で裏付けられる。

- (37) ? **Habían muchos libros**
 had many books
 3 pl pl pl

2.6.5.1.

ハンガリー語の直接目的語呼応に関して、呼詞 NP が不在であるのに呼応形態素がマークされる例があるが、2.6.各項でみた統語的「降格」現象とは異なり、語彙固有の非生産的事例と推定される。ハンガリー語では定目的語を支配する他動詞と、それ以外の動詞の活用が区別され、自動詞は不定活用に属す [cf. その1 §1.9.2.]。ところが潜在的直接目的語すら欠く動詞に定活用の一致形が共起する場合がある。²¹⁾

- (38) **valaki megjár-ja (valami-vel)**
 ‘Someone has trouble (with something)’
 (39) **valaki beér-i (valami-vel)**
 ‘someone satisfies himself with something’
 (40) **valami megér-i (valaki-nek)**
 ‘something is worth doing (for someone)’

動詞語尾の **-ja, -i** が主語 3 **sg** 定目的語を標識化している。上記の3動詞は不定活用も許すし且つ両活用で語彙意味を対立させるので、空位の定目的語 slot を設定して²²⁾ (38)～(40) の呼応形を導かざるを得ない。このケースでは無標の **agreement morpheme** が自動的に指定されるのではないけれども、強制呼応の一変種と考えるべきだろう。

2.6.5.2.

不定目的語の潜行が特殊なマーカーで表示される時、結局それ自身が不定目的語を顕示することになるので、呼応形態素とみない。他動詞の不定受格が何の形跡も残さず消去され得る大抵の

言語と異なり, Classical Nahuatl では不定非再帰目的語が〔人間〕〔非人間〕の区別を有す非ゼロの形態素で標識化されなければならない。

- (41) ²³⁾ a. ϕ - tla - cua - ϕ
 3 - indef. ob. - eat - sg
 non-hum ‘He is eating (things)’
- b. ϕ - te - cua - ϕ ‘It is eating (people)’
 3 - indef. ob. - eat - sg
 hum

この時, (41a, b) 文には主語一致のみが含まれ, 動詞が目的語と(強制)呼応しているとはみなさない。

2.6.6.

3人称複数形動詞を含む構文が, しばしば非人称の subtypeとして取り上げられる。現代ヘブライ語 (42a, b) 及びロシア語文 (43a, b) はこの例である。

- (42) a. pitxu et hara’eyon be angliya
 developed OM the-idea in England
 3 m. pl
 ‘They developed the idea in England’
- b. ye’argenu od cvatim bekarov.
 will-organize more teams soon
 3 m. pl
 ‘More teams are going to be organized shortly’
- (43) a. Ulicu zasypali peskom.
 street strewed with-sand
 acc past 3 pl
 ‘The street was strewed with sand’
- b. Tam umyvajutsja.
 there wash up
 3 pl
 ‘People are washing up there’

類似構文は他の言語にも珍しくないが, このような 3 pl呼応は一定の素性集合からなる潜在呼詞に呼応を負うのか, 又は元来, 統語主語は存在せず一種の無呼詞非呼応とされるべきなのか, それともいずれでもないのであろうか。ある言語で 3 pl非人称と隣接構文 (e.g. 正典的受動文, 再帰受動非人称文 etc.) とが有意的な対立をなし, 前者の呼応形態素に無色の「非人称」とは違っ

た何らかの特徴が認められる限り，[+plural] を内包する別種の PRO を仮定してもよいであろう。例えば，非話者・非聴者指向性が強く，単数辞項に抵触する含意があるケースでは，それは十分な実質を伴う要素と言えるから，応詞が統語論のレベルで，3 pl と相応しても当然である。多くの言語で，次例のペルシャ語，²⁶⁾ スペイン語のように，特定3人称複数を指す承前代名詞の機能を併せもつ両義性が見られ，両用法の区別は談話文脈にかかっている。

(44) Per. guyand ‘They say / It is said’
say 3 pl

(45) Sp. dicen ‘They say / It is said’
say 3 pl

もしある言語で「非人称」が一般的に3 pl 形でのみ実現される時，自動的強制呼応とみなされ得ると思われる。しかし中間段階にあってその判定が困難な場合も予想されるが，上の引用を始め実例の多くはむしろ非強制的呼応である。

2.6.7.

これまでの2.6.節各項を通じて“強制呼応”という呼応形式が自然言語に存在するものと見た。そのとらえ方の根幹にある「無呼詞」概念には違った視点から批判を容れる余地があり，従って強制呼応それ自体を疑問視する見解があり得ることに留意して，改ためて論点を整理して置きたい。

無呼詞状態が直ちに呼応停止に結びつかず，その言語に既存の呼応形態素の set の一つが応詞に与えられると見る代りに，無呼詞というのは誤りで，実は不可視の呼詞が潜在しそれが特定呼応 marker を選択すると解釈することも可能である。既述の各例で無呼詞は殆ど主語不在と関連するものであったので，以下の考察も，無主語と呼応の関係に限定するが同趣旨の議論が他の文法関係にもあてはまるであろう。文 (36) を例にとれば，動詞 haber ‘to have’ は ϕ 主語を統語結合価として固有に持ち，この Invisible subject は応詞に3 sg 一致形をもたらすと規定して置けば，少なくとも形式的には同じ結果が得られる。²⁷⁾ 相対立する二つの見方は単なる手順の相違に過ぎないと一蹴されるかも知れないが，本稿は両案を統一して呼応の実態をより適切にとらえる新たな解法を採ることにする。

呼応言語において動詞Vが意味・統語的理由で呼詞となり得る文法関係をもつ Nom と共起しない時，この動詞の統語的扱いは次の3通りである。

(46) I. V は呼応形態素 n を得る

II. V は呼応文法関係を持つ語彙的に“空”の Nom と共起し，同時に呼応形態素 n を得る。

III. V は place holder の Nom と共起し，同時に呼応形態素 n を得る

上の (I) (II) の相違は完全無主語と ϕ 主語との対立を反映している。主語に言及するすべての

統語操作の対象外にある非人称文があるとするならばその構造に主語 Nom は全く不要で, (I) によって応詞は無標形の *agreement morpheme* と結合するだろう。類型 (I) の動詞構文が実在するか否か, 現在のところ筆者はそれを裏付ける資料を持たない。しかしこの純粋な強制呼応形式が *a priori* に排除されるべきと速断する理由もないように思われる。

明示主語を欠き一般に無人称文と呼ばれる構文は概ね (II) に属す。

- (47) a. Xočetsja v školu.
want-Refl to school
3 sg

‘One feels like going to school’

- b. Načinaet xočet’sja v školu.
begin want-Refl to school
3 sg. inf.

‘Someone begins to feel like going to school’

例えば上掲のロシア語非人称文に空主語²⁸⁾を認めることにより, それが補文から *aspect* 動詞の主文主語へ上昇した文 (47b) の呼応を容易に扱うことができる。(48) に見られるような大気現象の表現 [cf. 2.6.1.1.] に ‘主語なし’ の動詞が 3 sg で現われる例は珍しくない。

- (48) Blackfoot (Algonquian)²⁹⁾
a – isoota – wa

‘It is raining’

durative – rain – 3 sg.

文 (49) のスペイン語 *llover* ‘to rain’ も同類だが, 一部の文法家が主張するように “始めから終わりまで” 主語と縁も所縁もない動詞なのではなく, ゼロ主語の設定がもたらす便益は少ないと考える。

- (49) a. Quiere que llueva.
want that rain
3 sg 3 sg

‘He wants that it rains’

- b. El quiere que llueva.
He

- (50) a. Quiere llover.
want to rain
3 sg inf

‘ It is going to rain ’

- b. * El quiere llover.
He (It)

(49a) の主文には 3 sg の定主語が隠在し、補文動詞は ϕ 主語なので、勿論 EQUI は適用されない。一方 (50a) は主文も補文も ϕ 主語を有し、逆に同一名詞句削除が義務的で、この意味解釈では (49a) は成立しない。又空主語は音形上 ϕ でなければならず (50b) は非文になる。 ϕ 主語導入の利点は不定詞形 [v.g (47b), (50a) の補文動詞] の出現と主語の撤去・撤廃を容易に関連づけ、‘主語がない状態’を統語的に細別することを可能にする点である。

注意すべきは (46) I, II のどちらにおいても主語が **agreement** を惹起するのではなく、dummy 的な空 **nominal** を仮定するのは呼応の引き金としてではなく、呼応以外に統語上の根拠がある場合に限られる。以上のように考えれば、タイプ II の無人称文がある面で有主語文と同じく振舞う事実がとらえられるし、またゼロである故、形態・統語素性 (e.g. 3rd Person) などの中身を持たない主語が相応 **feature(s)** を応詞に移すことはなく、(I) と同様のプロセスで強制的無標形態素が与えられると分析ができる。

(46) III により挿入される **expletive** がいかなる場合にも呼詞となり得ないかどうかは問題となるかも知れない。代用形として出現する英語 *it*、独語 *es*、仏語 *il* などが承前定代名詞として別個体系内に存在し、且つそれらに呼応能力がある故に、非人称文第 III 型式の呼応もこの事実に便乗して取り扱おうとするのが伝統的な生成文法の手法であったと判断される。言い換えれば *it* 等の補充詞を呼詞とする正常呼応と見ているのである。しかし、少なからぬ言語でこの種の場所埋め的小辞と独立に (i.e. タイプ II) 無標の 3 sg. m. (n.) 形が頻出することから呼応形態素の源を実質のない **place-holder** に求めるべきではないように思われる。(II) と (III) に共通なのは主語の存在が有名無実で、あたかも無主語であるかのように無呼詞呼応が成立するという事実である。

本稿では (46) に更に制約を加え強制呼応の範囲を狭く規定したいと考える。即ち、それは任意の形態素でよいのではなく、対象言語の有人称呼応形態素の **set** に含まれていなければならないという条件を課す。従って、動詞の通常の人称・数・性などの **paradigm** と別種の **marker** が非人称を標識化している次例文などには強制呼応は関与しないと見る。

(51) Welsh ³⁰⁾

- a. gwel-ir ef ‘ He is seen ’
see-impers he (him)
b. dywed-ir ‘ It is said ’
say-impers

(52) Irish ³¹⁾

- a. Buailleadh é ‘ He was beaten ’
beat-past-impers him

- b. Caoineadh an oíche ar-fad
cry-past-impers the night through-out

‘ There was crying all night long ’

(53) Finnish

- a. Syötiin kala ‘ The fish was eaten ’
eat-impers fish-abs
- b. Käskettiin hântä syömään tuo kala
order-Past-impers him to eat that fish-abs

‘ He was ordered to eat that fish ’

但し impersonal marker が一般呼応形態素と同じ位階上に相補的に出現せず、また無標形が音韻 ϕ のとき、強制呼応か否かの判定は難しい。³³⁾ Classical Nahuatl の人称能動文 (54a) と非人称文(54b) を比較すると、前者は 3 pl, 後者は 3 sg 一致形態素で特徴づけられると見て問題はなさそうである。

- (54) a. \bar{o} - ϕ - huetzca - ϕ - queh
antecessive-3rd-laugh - pret - pl

‘ They (specific individuals) laughed ’

- b. \bar{o} - ϕ - huetzc - o - ϕ - c
ante. - 3rd - laugh-impers - pret - sg

‘ People laughed ’

ところが非人称性はただ 3 sg marker だけでその機能を果すのではなく、動詞幹の拡張として - \bar{o} - が付添せられている。接尾辞 - \bar{o} c を独立の不定人称主語と解釈するならば、上例は強制呼応に該当しないという見方もできよう。Nahuatl の人称標識は prefix であるから、- \bar{o} - をそれと同列に扱うわけに行かず、又非人称marker は単一異形態で実現されるのではなく、動詞の統語類や個々の語彙に特有な不規則性に富むので呼応形態素と認めるのに無理がある。文 (54b) には、結局、³⁴⁾ 無標呼応プラス impersonal 語幹の派生という 2 重の coding がなされていると考える。

2.6.8. 反呼応

最後に不呼応でも非呼応でもない特異な型式を一瞥しておこう。不定人称文で基底受格が昇進せずにそのまま対格化される種類の受動文をこれまでに幾つか見た。呼応言語ではそれらの動詞に強制呼応が作用するのが常であったが、主語不全状態がそのまま主語の完全撤去となり、呼応も発動しないケースがあり得るだろうか。³⁵⁾ Nichols (1979) の記述から推定すると Ulcha 及び Nanai

（共に Manchu-Tungus）に見られる無主語構文は数少いこのような事例に当たる。

(55) Ulcha

ti dūse-we hōn-da ta-wuri
dem tiger-acc how-ptc do-present pass

‘What’s to be done about that tiger?’

(56) Nanai

ej dąsa-wa tej erinčie xola-o-xan bičin
dem book-acc dem time read-pass-past aux (past)

‘The book had already been read by that time’

3 pl 形動詞による非人称文と対立するこれらの受動文は法時制・相に関連した諸々の副次意味が加味せられるが、(55)(56)で基底目的語の Promotion はなく、主語の不在が呼応停止と結びつき、動詞に agreement morpheme がないのが特徴的である。

類例を Kapampangan³⁶⁾の気象表現にも見出すことができる。この言語の動詞(述語)は主語と Agent に2項呼応し、もし Agent NP が主語に選択されれば1ヶの呼応代名詞が動詞後位に置かれる〔本稿その2、§2.1.1.5.参照〕。

(57) a. Mapali ya ing danum.
hot 3 sg det water

‘The water is hot’

b. Mapali ngeni. ‘It’s hot today’
hot today

(58) Mumuran ngeni ‘It’s raining now’
rain now

例えば (57a) で ing danum と応じて ya が現われるが、一般的に大気 of 暑さを述べる時、無主語文 (b) が用いられ呼応形態素は姿を見せない。文(58)もその動詞内格表示からたとえ ning uran ‘the rain’ のような Agent が仮定されたとしても、呼応が問題になる段階では無主語構造であり、また呼応も実行されなかったと考えなければならない。

これらの場合、呼詞の不在と共に呼応も不成立なので §2.6.1.～§2.6.7. で取り上げた無呼詞強制呼応に当らないし、又、呼詞候補の存在が呼応形態素として応詞に反映されない「無呼応」でもない。ある言語で呼応資格のある文法関係を持つ Nom が一定条件下で欠如し、その欠如をマークする手段が見当たらないとき、いわば“ \emptyset 呼応”に対立する価値があると考え、反呼応 Anti-agreement と呼ぶことにする。なお反呼応の概念には §2.6.7 で見た例文 (47b), (50a) etc. に生起するいわゆる不定詞形は含まれない。これらの不定詞形式は主語・テンスが撤去されてはいる

が支配節のNP や時制のcontrol 下にあることを指示する特別な標識 (φ 音形でない) が明確に分離できるからである。

未完

(1981. 4. 20)

註

1. スペイン語のse受動文・不定主語文etc. をめぐる多様な見解・分析と論争点の詳細については次の拙稿を参照されたい;
“seはどこから来るか—スペイン語再帰動詞構文について” —Hispanica No. 19 (1975), 70—84; “スペイン語se統一仮説に向けて” —大阪外大学報No. 42 (1978), 1—14; 主語性の概念とスペイン語の不完全主語文—Hispanica No.22 (1978), 15—29; “Antipassive and Reflexive Passive in Spanish” —Lingüística Hispánica Vol. 1 (1978), 54—74.
2. Donna Jo Napoli, The two si's of Italian. An Analysis of Reflexive, Inchoative, and Indefinite Subject Sentences in Modern Standard Italian. IULC, 1976. pp.117, 138.
3. Bernard Comrie, “In defence of Spontaneous Demotion: The Impersonal Passive” — Peter Cole and J. M. Sadock (eds), Syntax and Semantics 8, Academic Press. 1977. p. 49
4. Leonard M. Faltz, Reflexivization: A Study in Universal Syntax. Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley. 1977. P.14
5. William E. Harkins, A Modern Czech Grammar. King's Crown Press. 1953. p. 75
6. David M. Perlmutter, Deep and Surface Structure Constraints in Syntax. 1971. p. 13
7. Thelma D. Sullivan, Compendio de la gramática náhuatl. Universidad Nacional Autónoma de México. 1976. p.106
8. Gerhard Helbig und Joachim Buscha, Deutsche Grammatik. VEB Verlag Enzyklopädie Leipzig. 1972. p.157
9. Harry M. Bishop. “Wie Es Sich Verhält: some referential and syntactic functions of German Es without antecedent.” —BLS 5 (1979). pp. 34, 36
10. Weber D. Donaldson, Jr., French Reflexive Verbs. A Case Grammar Description. Mouton. 1973. p.93
11. Leonard H. Babby and Richard D. Brecht. “The syntax of voice in Russian” —Language 51 (1975). p.365
12. 意味上も構文上もこれと完全にパラレルな例がブルガリア語にも発見される。
Dnes ne mi se rabotati.
today not to me Refl work-3 sg
(Raina Moneva-Dolapchieva, Transformational treatment of some problems in Bulgarian syntax. University of New York at Buffalo. Ph. D. dissertation. 1976. p.86)
13. Marathon Montrose Ramsey. A Textbook of Modern Spanish. Holt, Rinehart and Winston. 1967. p.515
14. 対応のフランス語訳でも再帰 clitic を用いる表現が現われるが, expletive of il が要求される: De quoi s'agit-il ici ?
15. “Antipassive and Reflexive Passive in Spanish”, op. cit., pp.61-62
16. David E. Johnson and Paul M. Postal, Arc Pair Grammar. Princeton University Press. 1980. p.425
17. 彼らの用語で「非明示」(Inexplicit) 節点の一つであるOを一般的な PRO に代えて表わす。Oは表層でフランス語のon, 独語のman に相当するような要素とされる (pp.227-8, 390).
18. David M. Perlmutter and Paul M. Postal, “Toward a universal characterization of Passivization” —BLS 3 (1977), p.40; Johnson and Postal (1980) op. cit., p.275
19. David M. Perlmutter, “Impersonal passive and the Unaccusative Hypothesis”. —BLS 4 (1978), p.160
20. Johnson and Postal (1980) op. cit., p.227
21. Robert Hetzron, “Des compléments obligatoires en hongrois” —Word. Linguistic Studies Presented to André Martinet on the occasion of his Sixtieth Birthday. Part 3 (1969), pp. 152-3
22. Igor A. Mel'cuk, “Syntactic, or lexical zero in natural language” —BLS 5 (1979). p.257.
23. Richard Andrews, Introduction to Classical Nahuatl. University of Texas Press. 1975. p.48

24. Ruth A. Berman, "Form and function: Passive, middle, and impersonals in Modern Hebrew" –BLS 5 (1979), p.3
25. Mel'cuk (1979) op. cit., pp.233, 237
26. J. A. Moyne, "The so-called passive in Persian" -Foundations of Language 12 (1974), p.261.
27. 拙稿 "「主語性」の概念とスペイン語の不完全主語文" – Hispánica No.22 (1978), pp.15-29 は統語的 dummy の必要性を認め、'主語の完全空白説'の不備を指摘した。また Mel'cuk (1978) op. cit. でも ϕ elements, ϕ people の 2種の syntactic zero が無人称文に仮定される。同種のアプローチは他言語の分析にも散見され、無標呼応説に劣らず一般的な処理法であると考えられる。
28. Bernard Comrie, "Impersonal subjects in Russian" –Foundations of Language 12 (1974). pp.103,108
29. Donald G. Frantz, Toward a Generative Grammar of Blackfoot. Summer Institute of Linguistics. 1971. p.40
30. John T. Bowen and T. J. Rhys Jones, Welsh. Teach Yourself Books. 1960. p.137
Comrie (1977) op. cit., pp.56-7によれば, ef は形態論上, 主語・直接目的語両様に解釈し得るが, (51a) では直接目的語で, 従って同文の ir は主語の自発降格を Mark する。
31. Nancy Jean Stenson, Topics in Irish syntax and semantics. University of California, San Diego. Ph. D. dissertation. 1976. pp.246-7.
32. Bernard Comrie. "Antiergative: Finland's answer to Basque" –CLS 11 (1975). pp.112-121の分析はフィンランド語の Case Marking が特殊な反能格 (Antiergative) 型に属するという主張に基いており, Abs (絶対格) は次のような格指定関係における NP を指し, 通常の能格言語の格用語法と異なることに注意。

antiergative 言語の格指定

主語 (abs) V

主語 (abs) V 直接目的語 (antiERG)

V 直接目的語 (abs)
33. Andrews (1975) op. cit., p.81
34. Cf. Sullivan (1976) op. cit., pp.110-2
35. Johonna Nichols, "Syntax and pragmatics in Manchu-Tungus language" –Paul R. Clyne et al, (eds). The Elements: A Parasession on Linguistic Units and Levels including Papers from the Conference on Non-Slavic Languages of the USSR. CLS. 1979. pp.422-3
36. Leatrice T. Mirikitani, Kapampangan Syntax. Oceanic Linguistics Special Publications No.10. The University Press of Hawaii. 1972. pp.34-7